大正 14 年 9 月に見られた浦崎隕石

加　藤　一　孝
〈広島市こども文化科学館　〒730-0011 広島市基町 5-83〉
e-mail: kato@pyonta.city.hiroshima.jp

大正 15 年発行の天文月報第 9 巻第 3 号には，前年に見られたものとしていくつかの隕石についての記述があるが，その中の浦崎隕石（広島県尾道市）の調査をおよそ 70 年ぶりにしてきたので，その内容を報告する．

1.　はじめに

2004 年 8 月 29 日に山口県周東町にて，「玖珂隕石」の記念碑の除幕式をするので，その式に来ませんかと藤井　旭氏に誘われ出掛けていった．その場には多くの同好の士が集っていたが，その中の一人，旧知の S 氏から，島　誠博士の書かれた「宇宙塵・隕石」（1957 年紀ノ国屋新書）に出ている日本の隕石一覧表のコピーを渡された．S 氏はこの一覧に出ている隕石を，このまま放っておくとみんなの記憶から消え去ってしまうものもある，という危機感から調査する必要性を強く力説された．

私としては，2003 年 2 月に広島市内で発見された「広島隕石」が，県内で初めて発見された隕石で，しかも県内唯一のものとの認識があり，そのことは公に認められていたことであるので，多少の驚きとともにこれは是非調査が必要であるとの思いをもった．しかし考えてみれば，大正 14 年の出来事であるためそのことを知る人もなく，今更その真偽のほどを確認するすべはあるのだろうか？ との心配が脳裏をよぎっていた．

2.　ともかく尾道へ

10 月 14 日になってようやく現地に出掛けることにした．とにかく隕石について分かっていることは，当時広島県沼隈郡浦崎村というところに，隕石が落ちたらしいということだけである．事前に調べたところ，村は 1957（昭和 32）年に尾道市と合併し，現在は尾道市浦崎町と呼ばれている，ということまでは知ることができた．その場所は尾道市の飛び地のような地域であり，その日のうちにはとても現地の調査まではできないだろうから，今日は調査の方法を下見に行き，今後何度か通って資料などを調べるうちに隕石の行方も分かってくるだろうと思い，尾道に入った．

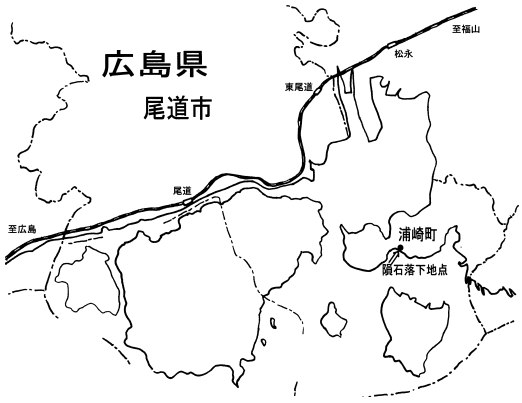

図 1　尾道市浦崎町の位置

まず尾道市立図書館の郷土史のコーナーに行き，尾道市史に隕石落下の記述が出ていないかどうかを調べてみた，また尾道市に合併する前の沼隈郡史も調べてみたが，そのような記述はどちら

にも全く見つけることができなかった．

それは予想していたとはいえ，全く手がかりのないままで帰ってしまうより，とにかく現地に行ってみようと思い直し，フェリーの時間などを調べに港に行った．しかし，頻繁にフェリーが出ているわけでもないことがわかったので，不便なところでもあり，やはり今日のところはここまでにして，次回来るときには車で来ることにしようと決めた．その前に市役所の文化財担当の部署に，ちょっと顔を出してから帰ることにしようと思い，尾道市役所企画部世界遺産推進課の文化財係を訪ねてみた．ここから急転直下この調査が進むことになろうとは，思ってもいなかった．

3.　いきなり隕石と対面

文化財係を訪ね，浦崎隕石って知っていますか？ と訪ねても，案の定，市役所の方はだれも知らないということだった．とりあえず文化財担当の宮本さんを紹介していただき，場所を移してさらに文献を調べてもらっても，浦崎隕石のことはどこにも出ていなかった．しかし宮本さんはそれにもめげず，浦崎町の郷土史研究家や古老の方々に，いろいろ電話で連絡を取っていただいている中で，隕石を持っているおばあさんを知っているという人が現れた．いろいろお聞きして，その隕石のあるというお宅に電話をすると，意外にもご本人が電話に出てこられた．そこでわれわれは早速役場の車でその家を訪ねることにしたのだった．

図 2　瀬戸内海に面した佐藤さんのお宅

図 3　当時の話をされる佐藤さん

その場所は穏やかな瀬戸内海に面したお宅で，大正 7 年生まれの現在 86 歳になられ，お名前は佐藤富江さんとおっしゃる方である．家の中には木の箱に入れられた“隕石”と称する問題の石も用意してあった．さてその問題の石であるが，結論からいうと残念ながら隕石とはいえないものであった．しかし佐藤さんのお話をお伺いすると，まさしくその場所に隕石が落ちてきたに違いないと思わせる，真に迫ったお話を聞くことができた．そこでいろいろとお話をお聞きしたあと，佐藤さんが隕石をお持ちだという情報を下さった，元小学校の校長さんで郷土史研究家の方にもお会いして帰途についた．

4.　隕石の落ちてきたようす

さてその隕石のことであるが，面白いことに佐藤さんはその石のことを「ほし」と呼んでいらっしゃったことだった．まずその「ほし」のことを訪ねてきた人は 70 年ぶりのことだと，とてもびっくりされていた．

その「ほし」が落ちてきたときのことを伺ったのだが，ご本人が 7 歳の時のことだったそうだ．薄明の残るまだ薄暗い夕方（9 月 13 日の 19：30

頃），雷の鳴るような“ドーン”という音に驚いてご本人が家の中から外に出てみると，大小の火の玉のようなものがおよそ北の方向から自分の居る頭の上を通過し，家の前の海に次々と落下していくのを目撃された．その数はだいたい 20 個ぐらいだったという．興奮のさめやらぬまま家の中に入りしばらくしたころ，ご本人の祖父（楳次郎さん）が，石を持って帰ってこられた．楳次郎さんが家の前の海岸に行ったところ，砂浜にこの石が落ちていた．そして石の周りの砂は少し盛り上がっており，その砂の色が少し黄色っぽくなっていたという．その石は異臭を出していたためしばらく（1 週間ぐらい）庭に置いていた．楳次郎さんはその石の裏に覚え書きをして木の箱を作り，その木箱の中に石を入れ，それを家の中に置いていたがまだしばらく臭かったという．

それからおよそ 10 年が経ち，本人が 17 歳になる頃の 4 月にある人が訪れて，石を広島大学で調べてもらうので，貸してくれないかといわれて貸したところ，しばらくしてその石が戻ってきたときには石の端が切り取られていたという．その後その方からは何の音沙汰もないまま 70 年経ってしまった．もう「ほし」のことはすっかり忘れていた今日，70 年ぶりにあなたが訪ねてこられたのですよ，ということであった．

そして興味深いことには，そこからほど遠くない鞆の浦（広島県福山市）には，昔，隕鉄が落ちてきたことがあると小さいときに聞かされたことがあるという．しかしいつごろの話で，今それがどうなっているのかは，よくわからないようだった．また，前述の郷土史研究家のお宅にお伺いしたときも，私は従兄弟から近くの山に隕石が落ちてくるのを見た，という話を聞いたことがあるということも伺った．この話は今回の隕石とは時代が数十年後になり，少し信頼性も薄いように感じた．

図 4　問題の石と収納してあった箱

図 5　石の裏にある覚え書き

5.　隕石の正体

ともかく今回の聞き取り調査で，隕石が落ちてきたのはほぼ間違いないようである．当時その場所は，現在のように立派な堤防があるわけでもなく，家の前はすぐ海岸で，家と海の間には，大八車が通れるぐらいの道しかなく，満潮のときには道近くまで潮が押し寄せてくることもあったそうである．そして隕石がばらばら落ちてきたという前の海は港があり（現在は浚渫工事もされたと思われる），尾道からのフェリーが 1 日数便行き来するところとなっている．

その後，数回現地を訪ねたが，その石は残念ながら隕石ではなく高田流紋岩という石であることが分かった．高田流紋岩はその近くに多くある石で，家の前の海岸を歩くと同じ石を多く見ることができた．

最初に見たときからご本人には，この石はまず隕石ではないと思います，とお話をさせていただいていた．本人は少しがっかりされたようだったが，それより「自分の話をきちんと聞いてくれて，自分の小さいときに目撃したものが間違いなく隕石であろうと，話してくれたことがとてもうれしかった.」とおっしゃったことはわれわれも心休まるものを感じた．余談だがその石が隕石ではないからといって廃棄しないで，おじいさんの形見として取っておいて下さいとお願いをしておいた．

6. ま と め

以上が浦崎隕石調査の顛末である．まとめると，隕石の落下が目撃されたのは 1925 年（大正 14 年）9 月 13 日の 19 時 30 分ごろであることには間違いはない.（ご本人の記憶も鮮明で，祖父が記録に残されている.）京大花山天文台のブリテン[1]は 4 月 12 日に落下と書かれているが，どうやらおよそ 10 年後になって，どなたかが調査をされた月が 4 月であったので，そのことと話が混同していたと思われる．

またその石の大きさ (18.7 cm × 10.1 cm × 8.5 cm) や重さ (1.4 kg) は，過去の記述にほぼ間違いはなかった．隕石の落下を目撃された佐藤さんの話から推察すると，隕石は海岸に落ちたのではなく，もう少し先の瀬戸内海に落下したものと思われる．今から探そうにも，港の浚渫工事も行われており，ほとんど探し当てる望みはない．それどころか，あるいはわれわれの思っている以上の沖合に落下している可能性の方が高いのではないかと考えられる．今回，本物の隕石に出会うことはできなかった．しかし，当初何気なく訪ねただけだったが，糸をたぐり寄せるように，あっという間に目的のものに出会うことができた．しかも瀬戸内海に面した風光明媚なところで，素敵なおばあさん（失礼）に出会ったこと，それだけでもすがすがしく幸せな思いであった．

7. 謝　　辞

最後になりましたが，今回隕石についての調査をするにあたり，各方面で多くの方にお世話になりました．誌面を借りてお礼を申し上げます．

参 考 文 献

1) 1925, BULLETIN, 京都大学花山天文台